

## 共通の目的を達成する過程での幼児のモチベーションの変化の検討

○ 加藤美香子（学校法人愛光学園 こども教育文化研究所）

加藤富美子（学校法人愛光学園 三和幼稚園）

### 背景

近年、教育現場での集団活動場面における「モチベーション維持」の難しさが指摘されている。モチベーションについての研究においては、脳機能の発達と深く関連していることも知られている。

これについて小学生や中学生を対象とした研究が進んでいるが、幼児期のモチベーションについての研究はほとんどないという現状がある。

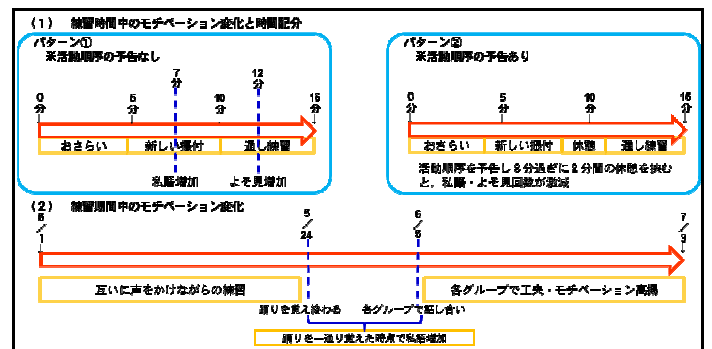
これまでの研究により、幼児期のモチベーション持続時間は 10～15 分が限界であると言われていることは広く知られている。また、モチベーションが持続されやすい活動は『内発的動機づけ』による活動であることも明らかになっている。

そこで本研究では、『内発的動機づけ』から展開したダンス練習場面における、幼児期の子どもたちのモチベーションの維持・変化を、脳機能発達過程と関連づけながら記録・分析を行なうことにより、モチベーション維持に適切な活動方法の検討を行なった。

### 方法

- (1) 対象 年長児 男児 9 名，女児 14 名，計 23 名
- (2) 過程 ダンスオーディション（外部）に向けての練習時間・期間のモチベーションの変化を映像・筆記記録し，分析・検討を行なった。

### 結果



今回の研究では、幼児期の集団活動場面におけるモチベーション持続時間が 10～15 分であることが確認された。また、脳機能発達の側面との関連から検討すると、幼児期は認知機能と関連する前頭前野が未発達な状態であるため、時間の長さや活動の計画についての概念が未形成な時期にあると考えられる。そのため、「活動の見通し」や「目標の確認」を明確に示した活動が、モチベーション持続を助長するであろうと推測される。これは、モチベーション持続期間についても同じことが言えることが確認された。

本研究では幼児の「集団活動」に焦点を置いた。本研究の成果を基に、今後は更に「個人的活動」に関する研究も行なっていこうと考えている。